特集2

ゆったり、のんびりだけじゃない。
でも地方暮らしはスバラシイ！

地方で
クリエイティブに生きる

クリエイティブに働く場所は東京や都市だけではない。クリエイターの中には都会から地方へ移住した人、生まれながらの土地で働く人とさまざまいるが、彼らはなぜ地方での暮らしを選んだのか、東京のような大都市とは違ったどんな働き方ができるのか。本特集では、自分の将来や人生設計を見定めて地方で暮らすWebクリエイターたちを紹介しよう。

Text　奥田高大、栗原亮、小平淳一、氷川りそな、牧野武文
Photo　佐藤アキラ（http://akirasato.com/）
　　梅田彩華（http://www.umephoto.net/）
　　酒井咲帆（http://www.albus.in/）
　　永井茂樹（http://shigephoto.com/）
　　和田博（半夏舎）
協力　須田大介（スマートデザインアソシエーション）、東信史（エリアル）

長野県長野市のパブリックスペース「OPEN」
http://open-gondo.com/

朝比奈利奈（あさひなりな）

東京の会社でシステムエンジニアとして勤務した後、29歳で長野県に移住。以後、「TERRACOYA」の屋号でフリーのWebクリエイター・Webシステムエンジニアとして活躍している。

経験ゼロで地方のWebデザイナーとして開業

確実に、誠実に。寺院の花嫁が長野でWebデザイン

長野県／小布施（おぶせ）町

人口：1万1,305人（2015年1月）
面積：19.07km²

長野県の北東に位置する。葛飾北斎など歴史遺産を活かした町づくりで、現在では県内有数の観光地として人気を得ている。

東京で業務システムの開発をしていた朝比奈利奈さんは、結婚を機に長野県に移住。「寺の嫁」として生活する傍らWebデザイナーとして地域に根ざして仕事をしている。東京と長野で仕事への姿勢において変わらないもの、違うものとは？

思いがけない突然の移住

長野県小布施町は、古い商家の建物が軒を連ねる、歴史情緒あふれる地域だ。葛飾北斎をはじめとする多くの画家・作家たちが訪れ、この地で幾多もの作品を残している。朝比奈利奈さんは、そんな小布施の中にある寺院のお嫁さんとして長野にやってきた。

現在、朝比奈さんはフリーランスのWebクリエイター・Webシステムエンジニアとして活躍している。しかし、長野に来るまでは、Webデザインの仕事には携わっていなかったという。

そもそも朝比奈さんが小布施に移住したのは、ご主人との結婚がきっかけだった。もともと東京で業務システム系のエンジニアとして働いていた朝比奈さんは、東京で現在のご主人と出会って交際を続けていたが、そろそろ結婚を‥‥という頃になって、突然彼が実家に戻ることを決めた。あまりにも突然のことで、結婚を考え直そうか躊躇したこともあったそうだが、最終的には彼と一緒に小布施で暮らすことを選んだ。今から6年ほど前のことだ。

「仕事に合わせて生活を変えるという人が多いと思いますが、逆に、生活に合わせて仕事を変えるのもありかなと思い、小布施に来ることにしました」

未経験からのスタート

もともと働くのが好きだったという朝比奈さん。結婚後も何か仕事をしたいと思っていたが、寺院の行事を手伝う機会も多いだろうし、フルタイムの会社員として働くのは難しいのではないかと考えた。そこで選んだ道が、フリーランスだった。そして、長野の企業や店舗のWebサイトを自分でつくってみたいと思い、「フリーのWebデザイナー」に行き着いた。

とはいえ、それまでの会社では企業や官公庁などの業務システム構築が中心であり、Webデザインの知識も経験も、ましてや仕事のツテもなかった。朝比奈さんは通信教育でWebデザインについて学びながら、ビジネスマッチングサイトに登録したり制作会社に問い合わせたりして仕事を探した。そうしているうち、地元の制作会社と取引が決まり、そこから地元企業や店舗のWebサイトを制作するようになっていった。

「まだ小布施に来て1年くらいの頃でした。未経験でも構わないと言ってくださったんです。その制作会社に巡り合えたのは、私にとって本当にラッキーでした」

それから徐々に実績を積み重ねてきた朝比奈さんだが、あるとき地域のイベントに参加して、仕事の幅や人とのつながりが一気に広がったという。

「小布施に来て2年くらいは、環境に馴染むのに精一杯であまり外には出なかったのですが、そのイベントに参加したことがきっかけで次々と人のつながりができました。今、長野市のシェアオフィスにも顔を出しているのですが、そのシェアオフィスの運営の人と出会ったのもその頃でした」

足湯につかりながら仕事

今では地域に根ざして仕事をしている朝比奈さんだが、結婚前の朝比奈さんにとって長野は未知の土地だった。

「長野は遠い場所という印象がありましたが、実際は思っていたよりずっと近い場所でした」

打ち合わせのため東京に行く機会も多いそうだが、実際電車を使えば2時間ほどで行くことができる。また、暮らしてみてわかる長野の魅力は他にもたくさんあるようで、「人がいい、自然がいい、食べ物がおいしい」などなど、挙げはじめたら止まらないほど。

「山に囲まれているのが、なんとなく安心感につながります。それに、山の中の温泉で足湯につかりながらノートPCを開いて仕事をすることもあるんですが（笑）、そんな時間が過ごせるのも長野ならではです。東京はとにかく仕事を中心に考えてしまいがちですが、長野では、趣味の時間や自分の時間を大切にしている人が多い気がします」

そう話す朝比奈さんも、東京で勤めていた頃は夜遅くまで働くこともあったそうだ。現在はフリーランスということもあって仕事時間は流動的だが、それでも午前9時〜午後6時を目標に働いているという。

最後に、地方でフリーランスとして働くために必要だと思うことを話してくれた。

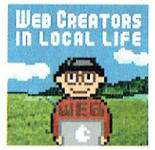
「一つは、人と人のつながりを大切にすること。そしてもう一つは、とにかく真面目に働くことでしょうか。良い評判はすぐに広がるし、ダメな噂も広がるのが早いんです。締め切りをしっかり守ったり、当たり前のことを誠実にやっていくのが大切だと思います」

スケジュールを守るというのは、当たり前に見えて意外に難しいことだ。実際は、なかなか思い通りに仕事が進まなかったり、つい予定を先延ばしにしてしまうこともあるはずだ。それでもきっぱりと「締切を守ることが大事」と言い切れる朝比奈さんは、とにかく誠実に仕事をしてきたという自負があるのだろう。今の朝比奈さんの活躍があるのは、単に運が良かったからではなく、そうした誠実な努力の積み重ねが実を結んだものに違いない。

長野県の旅行代理店「長野トラベル」のWebサイト。デザイン・コーディングだけでなく、ツアーの検索・申し込みシステムなど、独自のCMSを構築した
http://www.oak-tour.co.jp/

小布施町にあるスポーツ施設「小布施オープンオアシス」のWebサイト。レスポンシブWebデザインになっている
http://www.obuse-open-oasis.jp/

「小布施若者会議」というカンファレンスの告知サイト。ディレクションからデザイン、コーディングまで担当。シンプルなデザインにまとめ、左側にドロワー型のサブナビゲーションをつけてアクセントとしている
http://www.obuse-conference.jp/2013/



朝比奈さんは、長野市にあるシェアオフィスも利用している。ここには、フリーランスのデザイナーや編集者などさまざまな人が集まり、そこから新しい仕事や交流、アイデアが生まれることもあるそうだ

株式会社 Gear8

http://ggggggggg.jp/

ブランディング、マーケティングの視点を採り入れ、企画・設計からWebサイト制作まで行うWebディレクションチーム。道内企業だけでなく、全国にクライアントを持つ。

写真は左から代表取締役 水野晶仁さん、中央がWebディレクター 北川ふくみさん、右が同じくWebディレクター 待島亘さん。

地元出身者と移住者が語る札幌のWeb仕事

地元密着のコミュニティに入り込めるかがカギ

札幌の業界でも注目を集めるWebディレクションチーム「Gear8（ギアエイト）」。関西からのIターン者1名の他は地元出身者である同社に、道内外それぞれの視点から札幌で働くことの魅力を聞いた。

北海道／札幌市

人口：194万3,723人（2015年1月）
面積：1,121.12km²

全国の市の中で4番目の人口を有する日本最北の政令指定都市。大自然の恵みから第一次産業がメインと思われがちだが、札幌市においては第三次産業がもっとも発達。また、「札幌型ものづくり産業」としてIT産業・バイオ産業・コンテンツ産業が新たな産業振興として発展している。

生活面の不安は先に解消しておく

東京、神奈川、大阪、愛知についで国内4番目の人口を誇る北海道・札幌市。駅周辺にはデパートや商業施設が建ち並び、すすきのに代表される歓楽街もある。一方、30分も車を走らせれば、瞬く間に大自然に囲まれる。街と自然がとてもいい“距離感”にあるのが札幌市だ。

2009年、代表の水野さんが立ち上げたWebディレクションチーム「Gear8」は、そんな札幌市のなかでも注目を集める制作会社の一つ。現在12名のスタッフを抱え、道内の大手・中小企業から、独自のこだわりを持つ道外の中小企業まで、コーポレートサイトやブランドサイトを中心に幅広くWebディレクション・制作を手がけている。

「今は仕事の約6割が道内で、残りが道外。そして道内の約6割が札幌市内のお客さんです。道外の場合はWebサイトを見てご連絡くださる方が多いので、東京を含めて全国に散らばっています」

同社のほとんどのスタッフが北海道出身だが、ディレクターを務めている北川ふくみさんは唯一の関西圏出身。2007年に京都から札幌に移住し、同じく札幌のWeb制作会社を経て、2011年からGear8で仕事を始めた。

「札幌に来る前は大阪の制作会社で働いていたのですが、関西圏から出てみたいと思っていて、東京に行くか、札幌に行くかで迷っていたんです。東京だとバリバリ働くイメージがありましたし、生活費も高くなりそうだったので、その辺のバランスが良いのは札幌かなあと」

また、旅行で何度か訪れたこともあり「空気も景色も綺麗で、北海道にはいい印象しかなかった」という北川さんだが、それでも長年暮らした関西圏から、街の雰囲気も気候もまったく異なる札幌への移住。不安はなかったのだろうか。

「たとえば冬は経験したことのない雪国での生活を心配したこともありましたが、マンションなら雪かきしなくていいとか、室内は暖房機器が本州よりしっかりしていて寒くないとか、暮らす上での不安は事前に確認していたのでありませんでした。やっぱり一番の不安は仕事のこと。でも、これも調べていくうちに、それなりにはあることはわかったので、あとは引っ越してから探せばいいかなと思っていました」

コミュニティに根ざすメリットとデメリット

Webデザイナーやエンジニアは、PC一台あれば場所を問わずにできる仕事。とはいえ、移住するとなると、仕事や給料、待遇についての不安を抱いて当然だ。北川さんと同じくディレクターを務める登別市出身の待島さんは、東京と大きく異なるのは仕事の繋がり方だという。

「東京と比べて感じるのは、良くも悪くもコミュニティが小さいということ。札幌や福岡にはフリーランスで仕事をしている人がすごく多いように感じるのですが、それは会社で何年か勤めて、お客さんとの関係を上手く築いたり、同業の繋がりを持つことができれば、仕事をしていける環境が整いやすいからだと思います」（待島さん）

だが、東京に比べれば仕事の絶対量は少なく、横の繋がりがあれば、それだけ良い噂も悪い噂も回るのが早い。水野さんもその点は常に気をつけているという。

「エリアが小さいぶん、評判が次の仕事に直結するという意識は強いと思います。それは不安要素ではありますが、むしろ仕事をする上でいい緊張感にもなります。仕事内容では、たとえば最近は道内だとブランディングを丸ごと任せたいと言って下さる会社が増えてきました。これからは国内外問わず、ブランディングから丸ごと任せていただける案件を増やせるようにもがんばりたいですね」（水野さん）

小さなエリア、コミュニティだからこそのメリットとデメリット。それは人間関係も同じだ。特に北川さんのように知り合いがほとんどいない状態で移住すると、必然的に仕事で知り合う人と過ごす時間が多くなるため、仕事とプライベートでの付き合いに差がなくなってくるという。

「これは良い面でもありますが、ちょっと疲れるときもありますよね。都会で周囲の人とは関係なくやっていきたい人にとっては、ムラ社会のように感じるところもあるとは思います」（北川さん）

ただ、その土地の人や風土との相性が良いと、これほど居心地のいいものもない。それが地方の一番の良さなのかもしれない。そして暮らす上での環境は抜群だ。また、北川さんが何より好きなのが、北海道という土地と、そこで暮らす人間の人柄。移住を視野に入れたとき一番大事なのは、その点だという。

「やっぱり地域に根ざした仕事が多くなりますし、その結果、当然、北海道の人と深く関わっていくことになります。だから、土地や人が好きになれるかどうかで、地方暮らしの向き・不向きがでると思います。私も大阪にいたころは、ナショナルクライアントの仕事をやってみたいと思っていたときもありましたが、今はお客さんと一緒に北海道を盛り上げていきたいという地元愛みたいなものが沸いてきましたし、仕事としても面白く感じるようになりました」（北川さん）

また、北海道の人はもともと開拓された歴史を持つ土地だけあって、移住者を受け容れてくれやすいと北川さん。今後、クリエイターの移住先として、ますます人気が高まりそうだ。

男性8名、女性4名の12名が働くGear8のオフィス。そのうち道内出身者が11名で、多くは札幌市。だが、最近は求人応募者のなかに、いわゆるUターンやIターンで転職を希望する人も増えているという

lia Style
http://liastyle.jp/
札幌を中心に、デザイン注文住宅、リノベーションを手がけるFPホームの別ブランドサイト。朝・昼・夕・夜と、ユーザーが見ている時間帯に合わせてメインビジュアルが切り替わる仕組みになっている。下層ページはアニメーション付きのスクロールで、興味を持って読み進めやすい作り。ブランド名やロゴなども含め、ブランディング全体を担当している

ホテルサンダルウッド
http://www.hotel-sandalwood.com/
鹿児島県南種子島にあるデザイナーズホテルのWebサイト。徹底してリゾート気分を表現する手法にこだわり、オーナー自らiPhoneで撮影したホテル内の動画や種子島の美しい映像を掲載。波の音と合わせて星空を連想させるようなオリジナルのBGMも用意した。サイトオープン後、Webサイトを通じて著名人の宿泊があったことから、宿泊者も急増した

Webサイト制作以外にも、商品パッケージや企業の年賀状、タイ観光客向け自社サービスなど、幅広く手がけるGear8。最近は大手企業との仕事も増えており、道内での存在感は増す一方だ

週末移住体験を通して、本当に必要な生活を描く

地元の人たちと積極的に交流、丹波の魅力を都市に発信

はやしだまきこ
林田牧子
京都府京都市出身。IT企業に勤務し、その後丹波へ移住を決意。(株)ご近所に就職しWebプログラマー、ニューツーリズムコーディネーターとして地域の情報発信に取り組む。

京都から移住し、兵庫県丹波市の(株)ご近所で働くWebプログラマー林田牧子さんは、丹波の人たちと交流するうち、地域に生きる喜びや強さを感じたという。そして、丹波の魅力を都市の人たちに知ってもらう活動を、会社をあげて行っている。

丹波には何かがあるのではないか？

兵庫県丹波市にある(株)ご近所は、丹波市民の出資によって2012年に設立された。事業内容は丹波地域の魅力を情報発信することで、主に都市部で配布される地域情報誌『tocco.(トッコ)』の制作や地域ブランドのプロモーション、マーケティングなどを行っている。スタッフは7名で、いずれもおもに関西圏都市部からの移住者。今回話を聞いたWebプログラマーの林田牧子さんも、そうした移住者スタッフの一人だ。

京都出身で大阪の大手IT企業に勤務していた林田さん。当時は田舎暮らしに具体的なイメージは持っていなかったが、旅をテーマとしたイベントを通じて丹波市での移住者受け入れの取り組みを知ったという。

「丹波市に移住して長期旅行経験者を受け入れる活動をされていた方の講演を聞いたのがきっかけです。イベント後に2時間ほど待ってその方とと数時間直接お話しをして、丹波に行けば何かがあるのではないかという感覚で移住を考えるようになりました」

その後、週末を利用して2013年11月頃より体験移住を続け、2014年の6月に丹波市内へと移住した。現在は同じくIターン移住の同僚とシェアハウスで暮らしている。

「京都には山も川といった自然もありますが街は人工的に整備された空間で、もっと自然のある里山でどう遊べるのかを自分自身が知りたいと思いました。また、将来子育てする際に日常生活の拠点をどこに置くのかを考えたとき、田舎暮らしに憧れを抱きました」

一番は人の魅力

移住場所を丹波に決めたのは前述のイベントがきっかけだったが、実際に週末移住で訪れたことで「心をわしづかみにされる」感覚を覚えたという。林田さんをそこまで惹き付けた丹波の魅力とは何なのだろうか。

「丹波の魅力は自然が美しいというのもあるのですが、一番は"人"です。地元の人はもちろん、Uターン者もIターン者も努力を惜しまず、情熱や夢を実現できる人がたくさんいました。それまで仕事を生活費を得るためだけにしてきた私にはそれが新鮮で、見えている世界が大きく変わりました」

移住してから毎日が刺激的だという林田さんが一番驚かされるのは、Uターン後に(株)ご近所を設立した代表取締役の小橋昭彦さんだという。小橋さんはインターネット広告制作に早くから取り組み、地域情報化にWebマーケティングの手法を導入した第一人者としても知られている。

「移住者が働ける場所としての会社を用意して、オフィスを構えた上に給与が出せる体制を作り、丹波の人たちとのつながりを作って事業化してくれたことに衝撃を覚えました」

そして何より、これまでのITスキルを活かして丹波で働けているという事実こそが、林田さんが数年前まではまったく想像できなかった驚きだという。現在は雑誌『tocco.』と連携するWebサイトの制作、商工会議所の起業支援プロジェクト、農林業ボランティア支援団体の情報発信活動に関するWeb制作などを行っている。大会社の業務システム開発と異なり、ほかの仕事の進み具合を見て手伝ったりするのは小さな会社ならではで、いろいろと気付かされる部分も多いという。

「裁量権が大きいのは一長一短あって単純には比較できないのですが、私の求めていた働き方や生活スタイルが丹波にあったということです」

兵庫県／丹波市

人口: 6万7,540人(2014年12月)

面積: 493.3km²

兵庫県東部にある標高100m前後の盆地。農林業中心だが、パルプや携帯電話、菓子などの工業も盛ん。丹波栗、丹波の黒豆、大納言小豆などが有名。

(株)ご近所
http://gokinjo.sc/
「地方創生」をリードする企業の情報発信という側面を強調するため、社員の一人ひとりがなにを考えてなにをしているのがわかるようにブログ形式にした

tocco.
http://tocco.tamba.sc/
地域活性化をベースに丹波の暮らしぶりを大都市(大阪、神戸、東京など)に発信していくというコンセプトの情報誌(左)で、Webサイトとも連動している。都市部でセンスのよい暮らしを志向しているインテリアショップにも置かれることで、情報発信と同時に「土の付いた大根を手にするような地方の日常が、実は都会から見れば素敵であることを地域の人にもわかってもらいたい」という

オフィスではテーブルや椅子も地元の木材を利用。デザインは同社スタッフも関わっている。「Webがあったとしても、よいものがまだまだ知られていないというのは地方に共通した課題なのだと思います」

都会で働いていたときは基本的に3食コンビニという食生活だったという林田さん。同社オフィスで、地元の野菜などを使って料理することを「パワーランチ」と呼んで社員一同楽しんでいる。その結果か、林田さんは風邪をひくこともなくなったという

HopeFarm
http://hopefarm.jp/
(株)ご近所のもう一つの事業の柱が地域の魅力自体を作っていくことだ。具体的には地域ブランドを作ってプロモーションやマーケティングを手伝っていく仕事になる。都会と都市をつなぐ農場「HopeFarm」のWebサイトもご近所の制作によるもの

田舎は楽しいことで忙しい

(株)ご近所は週4日勤務のため、前職より収入は減っているという。物価や家賃相場なども特別安いというわけでもないが、同僚や地域の人に支えられることも多く、生活面で暮らしにくさは感じないという。もちろん、移動に自動車が欠かせない、コンビニのATMがないといった利便性の差はあるが、不必要な消費行動が減ることで生活の豊かさは増したと実感している。

「日役(ひやく)といって、草むしりやゴミ捨て場の清掃など、地域の協働作業があるのは地方ならではでしょうね。強制ではないのですが、地域の人との交流を望むなら参加するほうがいいと思います。都会の効率的なビジネスコミュニケーションと違って信頼ベースで話が進むので、ときどきでも"顔を見せる"のが意外と大事かもしれません」

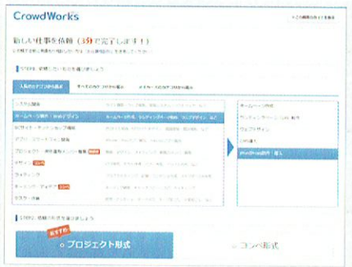
また、丹波の人たちのスピード感の速さや前のめりな姿勢にも驚かされるという。「のんびりというイメージで地方を捉えるのは間違いです。田舎のほうがイベントや楽しく刺激的なことがたくさんあります」と小橋さんも指摘する。

時折大雪や大雨などもあるが、常に自然と闘ってきた経験を持つ丹波の人たちは、それすらも楽しんでしまう強さを持っているという。

「都市にいたときは"迷ったらしない"という環境でしたが、ここでは"迷ったらする"を心がけています。転んでしまうこともありますが、そこから立ち上がるというのが大事で、私も日々転びますがそれを見守り支えてくれる人が丹波にはいます」

クラウドワークス
http://crowdworks.jp/
エンジニアやWebデザイナーに特化したクラウドソーシングサービス。非対面のまま仕事のマッチングから業務の遂行、報酬の支払いまでを一括で行うことができる。時間単位で仕事の受発注ができる「時給制」と、プロジェクト単位で受発注できる「固定報酬制」の二つが主な受発注方式となる

それぞれのワーカーのページには、クライアントからの評価やコメントが詳細に表示され、評価が平均して高いワーカーには仕事の発注が集まっていく



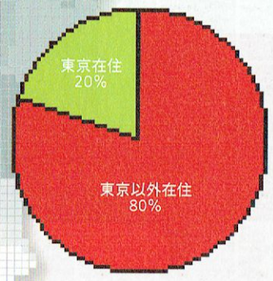
報酬は、企業が仕事を発注した時点でクラウドワークスに支払う。仕事が完了して、双方が納得した時点で受注者に支払われる。この方式だと、成果物に問題があって減額したいという場合でも、双方が話し合いで適切なところに落ち着くことがほとんどなのだという

仕事のために生活スタイルを我慢しない

場所を選ばない クラウドソーシングという働き方

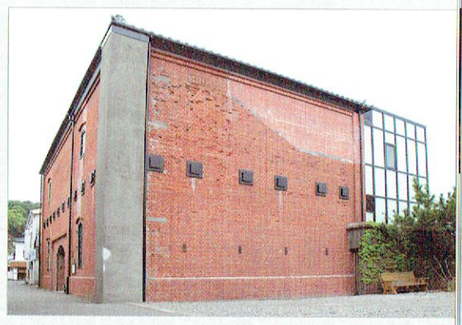
東京近郊だけでなく、地方に住んでいてもクリエイティブな仕事がしたい。企業や個人からの仕事をインターネット上で不特定多数の個人・企業に仲介する「クラウドソーシング」サービスは、それを実現できる一つの選択肢だ。この分野で飛躍的な成長を見せるクラウドワークスに、クラウドソーシングの現状と知っておくべきポイントを聞いた。

吉田浩一郎
よしだ・こういちろう
(株)クラウドワークス代表取締役社長兼CEO
東京学芸大学卒業後、バイオニア、リードエグジビションジャパンなどを経て、(株)ドリコムの執行役員を経験した後、独立。2011年11月、(株)クラウドワークス創業



現在、クラウドワークスの利用者は発注企業5万5,000社、会員数33万人。ワーカーは東京在住が2割、それ以外が8割(海外含む)。仕事の累計依頼総額は204億円にのぼる

全国各地で地域に根ざして活動する団体・企業がクラウドワークスと連携し、アンバサダーとして、地元企業や個人にクラウドワークスの魅力や効果的な活用方法を伝えイノベーションを生み出す支援を行う。地域イベントや企業への勉強会等を通じて、企業におけるクラウドソーシング活用のノウハウ提供やコンサルティングを行う団体に提供されるライセンスだ



アンバサダーの一つ、宮崎県日南市の油津(あぶらつ)赤レンガ館コワーキングスペース(http://www.akarengakan.jp/)。日南市は今後、クラウドワークスと共同で「月間20万円稼ぐ」ワーカーの育成を目指すという

クラウドワーカーとしての有名人も生まれている。デザイナーの桐谷紘太郎氏は、東京の制作会社に勤務していたが、3.11の震災で自分の生活を考えなおし、福岡県糸島市に妻と子どももいっしょに移住し、クラウドワークスを利用しはじめた。現在は福岡からも移住し、あるときはフィリピン、あるときは日本と、家族で世界中を回っている。どこにいても、ネットさえ繋がる環境であれば、仕事ができ、生活を立てていくことができるのだ

■住むべき場所の常識を変える

現在、雇用の形態としては大別して正社員、派遣または契約、フリーランスの3つがあるが、どの働き方であっても仕事中心にならざるを得ない。正社員派遣か、契約社員の場合は基本毎日出社するというのが原則だから、どうしても通勤時間の長さが問題になってしまう。フリーランスの場合は、一般に仕事を少しでも多くとりたいということから、結局、大都市までのアクセスのよさを考えてしまう。

しかし今、クラウドソーシングという仕組みがこの常識を変えつつある。クラウドソーシングとは、不特定多数の人に対しサービス、アイデア、コンテンツなどを得るため、仕事を請け負える人を募集するシステム(プロセス)のことであり、クラウドソーシングサービスとは、その不特定多数の個人や企業と、仕事を依頼したい企業または個人の間を仲介するサービスのことだ。これを使って仕事を請け負えば、インターネット環境があるところであれば山奥だろうと離島だろうと、どこに住んでいようがかまわない。

クラウドソーシングそのものは2005年ごろから始まってスタートアップ企業を中心に活用され、今では米国でP&G社、ボーイング社をはじめ多くの企業が積極的に活用している。日本でもクラウドソーシングの利用は年々増加していったが、2010年あたりまでは「ネット内職」のイメージが強かった。企業側から見れば、信用度もスキルもわからない不特定多数の人に業務を依頼することになるので、テキスト入力、データ入力といったスキル不要で仕事量が測定しやすい単純作業が中心にならざるを得なかったからだ。単価は当然ながら安く、主婦や学生がこづかいを稼ぐのにはいいかもしれないが、生活の糧にするには無理があった。

しかしこの状況に、ここ数年で登場してきたクラウドソーシングサービスが一石を投じた。もっとも特徴的なのは、それらのサービスにおいて相互評価方式を取り入れた点だ。仕事の発注が行われ、完了すると発注企業、ワーカー双方が相手を評価し合い、その評価は公開され、累積していく。つまり、いい加減な発注をする企業、きちんと仕事をしないワーカーは自然に淘汰される。

この仕組みが、クラウドソーシングの業務内容を大きく変えた。発注企業はワーカーの評価は過去の累積評価を見れば正確に知ることができる。そのため、従来のような単純作業のネット内職のような仕事だけでなく、報酬100万円を超える企画立案、Web制作、デザインといったスキルを必要とする業務もクラウドソーシングされる例が増えた。

そんなクラウドソーシングサービスの一つがクラウドワークスだ。エンジニア・クリエイター向けを標榜して2012年のサービス開始し、2014年12月には東証マザーズで株式上場まで至った。そのクラウドワークスにおける発注企業は現在5万5,000社、会員数が33万人。その利用者の中には年収1,000万円を超える人も現れているという。利用者の活動地域はというと、東京在住が20%、それ以外が80%という比率であり、東京から地方に移住した人もはっきりとした統計があるわけではないが、おそらく5,000〜6,000人はいるはずだという。

「最近は海外に住んでクラウドワークスを利用する人も増えてきました。オーストラリアなんかはなぜか多くて、数百名の会員がいます」(クラウドワークス代表取締役、吉田浩一郎氏)。

■地方を活性化させる「アンバサダー」

吉田氏はクラウドワークスを例にして、地方で仕事をする場合、もっとも成功するパターンは、「例えば移住なら、リアルの世界で最低限生活できるぐらいの仕事を持っていく」ことが第一で、さらに「+αの収入をクラウドワークスを利用して得る」ことだという。最初からすべてクラウドワークスだけで生活を立てようとするのはリスクが高い。

地方移住をする最大のリスクは、リアル情報が不足することだ。農村へ移住して農業を始めるならともかく、農村でWeb制作やデザインといった仕事をするのなら、リアルな情報が不足してしまうことは避けられない。そのためにも、多くの地方移住成功者が口にするのが、「仲間づくり」だ。趣味を中心にライフスタイルを再構築するのであれば、同じ趣味コミュニティの中で地方移住を成功させた人に教えを請う。クラウドワークスではそのようなニーズに応えて、「アンバサダー」制度を整備し、日本全国でクラウドワーカーをサポートし、アドバイスする団体を設置する取り組みを開始している。移住を考えるなら、これらの地域ごとのアンバサダーに話を聞いてみるというのもよさそうだ。

そもそも、吉田氏がクラウドワークスを起業したのは、「ネットで仕事を紹介する」というような単純なことではなかった。多様な働き方を許容する世の中にしたいというのが吉田氏の理想だ。

「たとえば、正社員としてバリバリ働いていた人が、実家に戻って親の介護をしなければならなくなったとします。そこで、退職してクラウドワークスを利用し、週20時間介護、週20時間クラウドワーキングをして、年収300万円を確保する。この間のクラウドワークスでの評価実績はデータとして残り、公開されていますから、また正社員として雇用してくれるところはあるはずなんです」(吉田氏)

今、ほとんどの人が人生のステージに合わせて働き方をコントロールしたいと考えている。しかし、今の正社員、派遣社員、フリーランスという枠組みでは、このコントロールはとてもむずかしい。

「従来はだれもが未来のために今を犠牲にすることをしかたがないと思って働いてきました。でも、私たちはワーカーの方に“今”を大切にして生きてほしいと思っているのです」(吉田氏)

えんどうひろゆき
遠藤寛之

山形県出身。東京でのシステム開発会社勤務を経て、現在は長野県・上田市のWebデザイン会社Seekcloudに勤務。システム構築やコーディングを手がける。

家族との時間を大事にし、働くステージを変える

子育てのために東京から長野へ 日々の努力は場所を変えても活きる

山形県出身の遠藤寛之さんは、東京のシステム開発会社から長野県上田市に移住した。まったく見知らぬ土地で働くことを決めたのは、自分にとって今一番大切なものを手に入れるためだった。

長野県／上田市

人口: 15万6,606人(2015年1月)

面積: 552km²

長野県東部に位置し、戦国時代の真田氏が築いた城下町として発展した。ぶどうやりんご、キャベツなどの栽培が盛ん。一方で電気機器、自動車部品などの生産も多い。

高校卒業とともに単身東京へ

いまや一つの職場で生涯を送る人は少なくなってきたが、遠藤寛之さんも数々の転職を経験した人の一人だ。

山形県出身の遠藤さんは、高校卒業とともに上京。音楽が好きで、将来は東京で何か音楽活動をしたいと考えていた。最初は青果物の仲卸業で働きはじめたが、バンド活動をしはじめてからはフリーターになり、いくつもの職を転々としていた。当時の遠藤さんにとってはバンド活動こそが生活の軸であり、積極的にライブを行ったり、インディーズレーベルでCDを出すなどしたりと、かなり熱心な活動をしていたという。

「自分で期限を決めていたんですよ。25歳までに芽が出なかったらやめようって」

そして25歳を迎えた遠藤さんは音楽活動を諦め、新しい生活を求めてシステム開発の会社に就職した。とはいえ、実のところシステム開発に興味があったわけではなく、就職情報誌に記載されていた「週休二日」の文字に惹かれた結果だった。

その会社は、金融系の業務システムなどを手がけていた。入社1年目は開発に加わらずにプログラムのバージョン管理をしていたというが、2年目からは開発に携わるようになり、いろいろな仕事を任されていった。

田舎で子どもを育てたい

遠藤さんは26歳の時に、結婚という大きな節目を迎えた。結婚後まもなく子宝に恵まれた遠藤さんは、「田舎でのびのびと子育てをするのもいいのではないか」と考えていた。そんな時、奥さんの実家がある長野県上田市では子どもたち全員が家を巣立ち、親だけが生活する状況になったので、そこに身を寄せることに決めた。

「決めた」と簡単に言ってはいるが、東京での会社勤めを辞め、地方で働くということに不安はなかったのだろうか？

「根が楽天家なので、どうにかなると思っていました。しかも、移住のために退職を申し出たら、辞めなくてもいいという話になったんです。このことで収入面の不安は解消しました」

その会社の顧客企業が長野にあり、出向という形でそちらに勤務できる形になったのだという。そうして遠藤さんは上田に移り住み、1年間はその雇用形態が続いたが、リーマンショックの余波で出向先との契約が解消された。その後は東京と上田を行き来する日々が続いたが、これでは移住した意味がないと、あらためて退職を申し出た。

その後、遠藤さんは上田の人材派遣会社に就職し、会社のシステム構築に携わる。そして、その時の上司が独立してWebデザイン会社を立ち上げ、数年後に遠藤さんを会社に迎え入れた。それが現職のSeekcloud(シーククラウド)というわけだ。

地方に不安はなかったか？

このように遠藤さんはいくつもの会社を渡り歩いてきたが、収入が低下してしまう不安はなかったのだろうか？

「上田に移住したときは辞めずに済んだので、給与体系は変わりませんでした。ただ、出向先はほとんど定時であがっていたので、残業代がなくなって収入はずいぶんと減りましたね。また、そのあとに就職した職場でも給与は下がってしまいました」

遠藤さんは当時をそう振り返るが、それでも上田に移り住んだこと自体に後悔はなかった。

「家族といる時間が増えたので。それが一番大事なことでした」

移住してきたばかりの頃は、まだ幼い子ども達と一緒に、長野をあちこち回って観光を楽しんだという。子どもたちと出歩いたり、一緒に温泉に入ったりしている時が至福の時間だったようだ。

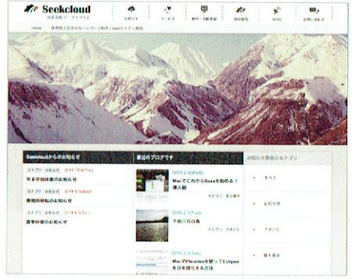
「長野は観光地のイメージが強くて、あちこち観光するのも楽しかったんですが、住んでみて、暮らす場所としても魅力的だと気がつきました。夏もカラッとしているし、長野県の中でも特に上田は晴天率も高いし、過ごしやすいです」

自らを楽天家だと語る遠藤さん。一見、流れに身を任せて職を変えてきたようにも見えるが、話を聞いていると、それぞれの時代を真剣に生きてきたことが伺える。仕事に直接関係ないプログラミング言語やWebの技術を独学で習得したりと、自分のスキルを磨くことにも熱心だったようだ。そうした真面目さがあったからこそ、移住を決心した時も会社に残るよう引き止められたのだろうし、現在の職場に声が掛かるという結果に結びついたのだろう。

遠藤さんに、現在満足しているかどうかを尋ねてみたところ、「まだまだ満足には程遠い」という。

「今の会社も成長させたいし、若い人の育成にもつなげていきたい。これからです」

今の遠藤さんは新しい会社のコアメンバーとして会社の運営について懸命に考えている。遠藤さんにとって大切なのは家族。家族と幸せに暮らす場所を守るためには努力を惜しまない。



Seekcloud
http://seekcloud.co.jp/
遠藤さんが務めるWebデザイン会社Seekcloudのコーポレートサイト。モバイルでの閲覧も考慮しレスポンシブWebデザインになっている

MIST Marine Cafe
http://www.hf-mist.com/
Seekcloudが手がけた長野市にあるダイニングバー「MIST Marine Cafe」のWebサイト。全画面を覆い尽くすスライドショーとパララックスを組み合わせたダイナミックなレイアウトと、今どきのデザインテイストを取り入れたシンプルなUIパーツが調和したWebサイトだ

バーコード作成ツール
http://seekcloud.co.jp/barcode
Seekcloudが作成したWebアプリ。JANコードを入力すると、SVG形式でバーコードを出力してくれる。同様のWebサービスが現在どこにもなくなってしまったので作成したのだという

福岡でコワーキング＆トライアルステイの場をつくる

移住者に拠り所となる居場所を RIZE UP KEYAの挑戦

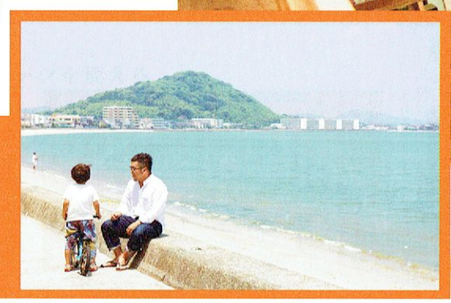
東は福岡市に、西と北側は玄界灘に面する糸島半島。その糸島、そして福岡に惚れ込んで東京からの移住に踏み切った須賀大介さん。社長一人で福岡に足を踏み入れて2年、「福岡移住計画」の活動もしながら、今度は東京に残してきた社員や、移住を希望する人たちも気軽に足を運べるよう、とあるコミュニティセンターを始めた。

福岡県／糸島（いとしま）市

人口／9万7,421人（2014年12月）

面積／216.15km²

福岡県の最西部に位置する。玄界灘に面し、豊かな自然環境が残されているにもかかわらず、福岡空港から1時間圏内と交通の便もいい。産業としては、あまおう栽培などの農業、漁業、観光で成り立つ。

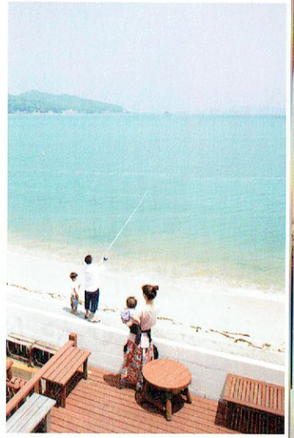


須賀大介（すがだいすけ）

茨城県出身。Web制作会社（株）スマートデザインアソシエーションCEO。東日本大震災をきっかけに、東京を離れることを考えはじめ、2012年から福岡へ移住。その半年後に、「福岡移住計画（https://www.facebook.com/fukuokaijyukeikaku）」を立ち上げ、移住者のサポート事業の他、島根や宮城など他地域での地域活性化にも取り組んでいる。 http://www.s-design.jp/

2階は主にコワーキングスペースとして提供されている。「人と人とのつながりを重視する地方だからこそ、仕事にも交流があってもいいのかなと思って」と須賀さんは考えた。今年に入ってからSDAのスタッフも参入して賑やかになっているが、スペースはまだまだ充分あるため「どんどん入ってきてほしい」とのこと
https://www.facebook.com/itoshimalifedesign

もとはスーパーの跡地で広大なスペースを持つRISE UP KEYA。この規模の施設を都心で維持するのは難しいが、地方であれば現実的なものになる。一つの目的や手段にとらわれず、より大きな分野での交流を目論む須賀さんのプロジェクトを支えるコア・コンセプトともなるのがこの施設だ



福岡県今宿市にある須賀さんの自宅を出ると、そこは大海原。RIZE UP KEYAともども申し分ないロケーションを手に入れた

地方都市だからこそできるワークスタイル

東京に会社の主機能にあたる制作部を残し、2012年夏に社長だけが福岡へと移動してマネージメントと自身が持つ案件の制作を受け持つようになった（株）スマートデザインアソシエーション（以下SDA）の須賀大介さん。本誌でもお馴染みの「福岡移住計画」を立ち上げ、イベントなど移住者へのサポートに勤しむ傍らで、2013年、半島北部の玄界灘にほど近いエリアにある広大な建物を1棟借り切り、コワーキング＆トライアルステイプロジェクトを実践するコミュニティセンター「RIZE UP KEYA」として運用を始めた。

このプロジェクトは効率化や事業拡大の結果ではない。大企業ではないSDAの社員数規模を考えればむしろその逆で、非効率的なことに本気で取り組んでいるようにも思える。クリエイター個人はもとより、経営者ならではの視点を持つ須賀さんから見た新しいワークスタイルがある。

SDAは中規模ながら、多彩なクライアント実績を持つWebデザイン会社だ。2003年の創業以来、会社の売り上げも順調に伸び、社員数も増えていった。しかし須賀さんの中には違和感が残った。

「会社は大きくなっていくのに、手応えというか達成感が得られなくなっていたんです」

仕事は忙しくなり、深夜まで作業が及ぶことも珍しくない業界だ。気がつけば会社の床で寝てしまい、自宅に帰ってシャワーだけ浴びてまた会社に戻るという日々が続き、「ヒットポイントがゼロに近づいているのがわかった」というほど公私ともに生活は破綻していったという。そこで、須賀さんは地方移住を真剣に考えはじめた。

事例はあった。須賀さんが移住する前年、2011年の震災を機にスタッフの一人が沖縄に移住し、そこを制作部にする試みを始めていた。その実績に後押しされるように、福岡へ移住する。すると、ワークバランスだけでなく、ビジネスに対する視点も大きく変わったという。まず、上流のクライアントから降ってくるようなウォーターフォール型の案件の受注は激減した。その代わりに須賀さんが「問題解決型」と分類する、クライアント一緒に作り上げていく案件が増えたのだ。

その例の一つが（株）スターフライヤーとのタイアップだ。北九州市の航空会社である同社の機内ディスプレイパネル広告枠に「福岡移住計画」プロジェクトを無償で全面採用してもらったが、これは須賀さんが直接同社に持ち込んだものだ。

「おそらくこういう案件は東京では、大手の広告代理店でなければ実現できなかったと思います」

こういった提案をできるようになったのも福岡移住の影響は大きい。とはいえ、誰もが気軽に地方へ移住できるわけではない。そこでスタートさせたのが、冒頭のRIZE UP KEYAというわけだ。生活コストが低いとはいえ、地元のコミュニティにすぐに馴染むのは難しい。そこで施設の2階を中心を、コワーキングスペースとして提供することにした。今ではSDAのメンバーのなかにも東京からの移住者が出るなど、利用者が増えはじめている。

同時に提供を始めたのがトライアルステイだ。初めての土地ではいきなり最適な住居を見つけることは難しい。須賀さんもこれは身をもって体験しており、まずは糸島という土地に慣れてもらうために施設の中に住居スペースを用意し、格安で宿泊できるようにした。もともと1階は企業が糸島の気候を満喫してリフレッシュしながら研修ができるエリアとしても設計されているため、宿泊スペースもかなり広い。旅行がてら来てもらって、糸島がどんなところなのか知ってもらえればという体験を重視するアプローチだ。

数値化できない、地方在住の体験価値

東京から離れ、糸島という土地でWeb制作を続けるメリットはどこにあるのだろうか。

「それは数値化、定量化できない部分にあると思います。たとえば、東京にいた時、ウチの子どもは神経質でちょっと内気だったのですが、ここにきてからのびのびと開放的な性格に育ってきました」

その影響は、周りの大人の関わりが大きいという。都会とは明らかに違う、コミュニティの積極的な交わりが子どもたちに強い影響を与えている。

「東京にいた時には妻に子育てを任せきりでしたが、こちらでは自分が子どもと触れ合う時間も劇的に増えました」

食生活に関しても同様だ。最近では質の良い食材は東京でも買うことができるが、ここ糸島では当たり前のように目の前にあるという。コストも安く、その気になれば農業を営みながら仕事をすることもできるため、月にかかる食費が数千円という生活も可能だ。もちろんこれは極端な例だが、ジビエなども手に入りやすいこの地方では、選択肢としてはけっして非現実的なものでもない。

その人にとっての「豊かさ」という価値観は異なるが、その多様性を支える選択肢の一つとしての地方在住は有力だ。自ら先駆者となってその事例を切り開く須賀さんのアクティビティに期待だ。

みさこたろう
三迫太郎

1980年、北九州市生まれ。北九州高専を卒業後にシステム会社や編集プロダクション、デザイン事務所などを経て、フリーのグラフィックデザイナーとして独立。身の回りにあるクリエイティブな情報を編集する活動「Prefab」、福岡発のzineイベント「10zine」の運営も。
http://taromag.misaquo.org/

地方都市であることをデメリットにしない

地元で働き続ける「のびやかな」生きかた

福岡で活躍する三迫太郎さんは、生まれも育ちも福岡という完全な地元定着クリエイターの一人だ。そんな三迫さんに、地方でクリエイターとして生きる理由を聞いた。

福岡県／福岡市

人口: 152万1,881人(2015年1月)
面積: 341.7km²
福岡県の県庁所在地である福岡市は、古くから経済、交通の要衝、外交・貿易の窓口として栄える。レベルファイブやLINEなど、大手IT企業も多く居を構える。

地方で自分の力をアピールするには

「地方在住」と聞くとつい構えがちだが、地元暮らしを続ける三迫太郎さんは「クリエイティブな仕事を求めて今から東京に行こうという気持ちはありませんね」とはっきりと答える。グラフィックデザイナーとして福岡で活躍する三迫さんのクライアントは、地元の企業やショップなどが中心だ。県外からのオファーも増えている。

とはいえ、自ら足を運んで仕事を取ってくるような、いわゆる営業活動的なことは行っていないという。その代わりに、Webサイトに自然と力が入っていくことになった。

三迫さんが「ひとりWebマガジン」と呼ぶ「taromagazine™」というブログを2005年から始め、そこに自身が手がけたサイトデザインやプロダクト、グラフィック作品をアーカイブとして残し、誰でも見られるようにした。手がけた作品だけでなく、日々の思うことを綴る「Note」やゲームレビュー、旅行記、イベント情報、食べ物に関する話題、インフォメーションといった三迫さんの身の周りのさまざまな情報をわかりやすくまとめた、まさにWebマガジンを一人で運営している。

そうするうちにtaromagazine™の"読者"が増えはじめ、アーカイブだけでなくその他の記事に共感したり、綴られる文章からテイストや好みを判断して仕事の問い合わせが入るようになってきた。さらにそこで好評なものがデザインブックマークサイトに転載されることも増え、発注に結びつくケースも出てきたという。

「ブックマークサイトなんて同じ業界人しか見ていないと思っていたので、お客さんに当たる層の人たちもチェックするんだと知ってびっくりしたのを覚えています」

コラボレーションが生まれやすい環境

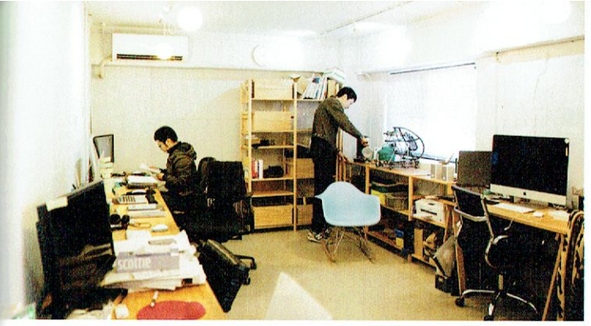
地方で仕事をする際に気をつけることはないのだろうか。三迫さんは「強いて言うなら、派手なキャンペーンサイトなどの案件は少ないかもしれません」という。100万人都市の福岡であっても、首都圏と比べると企業は圧倒的に少ない。大手企業が少ないため、地元の広告代理店を通じてもいわゆるクリエイターが憧れるようなメジャーな案件はまだまだ少ないのが実情だ。そうした意味では純粋にWebデザインだけでやっていく楽しみは見つけづらい。

その代わりに、市内で開催されるさまざまなイベントに集まってくる異業種の人たちとのコラボレーション案件などが実現することが多いという。コンパクトな都市だからこそ、一つのイベントに集まる「人種」の多様性は増える。「生活環境のクオリティを重視する福岡にはインテリアやファッションなど、センスを重視する業種のクライアントも多い」と評するように、そうした交流でモチベーションが生まれたりする面白さがあるという。

三迫さんは「そういう意味では、ある程度の個性がないと福岡での生活を100%楽しめないかもしれません」と付け足した。人と人との繋がりが重要なのはどんな場所で働いても変わらない。しかし、福岡で働く場合にはそのレバレッジの効き方が違う。誰かと関わるとき、Webデザインの能力に加え、自分が何に興味があり、何ができるかということを意識して動けば、さらに効果的だろう。

最後に、仕事についてのやりがいを聞いてみた。「まわりから『手を抜いているな』とは思われたくないですし、実績を公開した時に全国の方からポジティブな反応が返ってくるように心がけているつもりです。ありがたいことに継続して仕事も来ていますし、ちゃんとやれば結果も付いて来ていることを考えれば、地方で働くデメリットは感じたことはありませんね」

インフラが十分に充実した現在、所在地に関係なく仕事を続けて行くことができる。三迫さんはそれを証明しているといえるだろう。



フリーランス同士で集まって一つのオフィススペースをシェアする運営スタイルは、福岡でもトレンド傾向に。「シェアオフィスで独立して、法人化する流れも多くなって来ている気がします」

再開発の少ない福岡ではリノベーションも盛ん。三迫さんのオフィスのある「BLDG64」もそんな物件の一つ。1964年に建てられたビルを利用しており、入居の際は改装自由で、各スペースをカスタマイズすることができるという自由さ。屋上は全員の共有スペースになっており、みんなで花火を見たりBBQなどのレクリエーションも可能。最近ではベランダ菜園などの試みも始まっているとか

FUKUOKA ART DATE - 福岡アートデート
http://fukuokaartdate.tumblr.com/
福岡アジア美術トリエンナーレが行われた2014年秋の福岡のアートイベントを、複数のライターが紹介、レポートするTumblrサイトと、それを元に3回発行されたフリーペーパー企画。ネーミング、ロゴデザイン、Tumblrサイト、トークイベント会場サイン、印刷物、原稿すべての制作を担当。「大変だったけど、行政の仕事でこれができる自由さは、福岡ならではかもしれません」

taromagazine™
http://taromag.misaquo.org/
自称「ひとりWebマガジン」。実績の紹介を中心にイベントレポート、ガジェット、ゲームレビュー、旅行、日記などを掲載

下川 徹 / Toru Shimokawa
http://shimokawa.co/
Wallpaper Architects Directory 2009（ロンドン）で世界の建築家30組に選ばれた福岡の建築家のWebサイトのリニューアル。必要最小限のクライアントと付き合いたいという意向から、あえて間口の狭い構成になっている

CENTRAL
http://central-fuk.jp/
主に福岡を拠点とし国内外で活躍するプロダクトデザイナー、ファッションデザイナー、ショップオーナーなどの"日常"を、取材記事とブログで紹介するWebメディア

doinel / ドワネル - interior & grocery
http://doinel.net/
東京・青山の生活雑貨＆グローサリー＆ギャラリーショップ。オーナーが福岡出身という縁で依頼がきたという。WordPressとカラーミーショップの連携、読み物や展覧会などの特設コンテンツの運営に携わる

（株）アラタナ　http://www.aratana.jp/
宮崎県を拠点に、ECソリューションを提供するなど、ネットショップの立ち上げから運営の効率化にいたるさまざまな支援をしているベンチャー企業

社員が社内勉強会を自由に企画し、2人以上参加するのであれば、飲食費を会社が支給するという「ビザごち制度」など、さまざまな社内制度を設けているアラタナには、提携企業に社員を一定期間"留学"させ、社員の視野を広げる「クロスターンシップ制度」というユニークな制度がある

アラタナ社内。「宮崎に1000人の雇用をつくる」とし宮崎の地域活性化につながる事業展開をしているその結果、九州有数のベンチャー企業として成長している

クロスターンシップ制度の提携会社の一つ、ピクシブ（株）。東京都渋谷区に本社を置き、「イラストコミュニケーションサービスpixiv」（http://www.pixiv.net/）を運営している

提携会社もう一つは（株）リブセンス。東京都品川区が本社で、アルバイト求人サイト「ジョブセンス（http://j-sen.jp/）」、転職希望社向けの口コミサイト「転職会議（http://jobtalk.jp/）」をはじめ不動産業など幅広く手がけている

地域を知り、東京を知る。会社間留学制度

「東京はすごい」を払拭し、視野を広げる アラタナのクロスターンシップ制度

どこの企業も、人材の育成についてはなにかしらの悩みを抱えている。宮崎のベンチャー企業・（株）アラタナにも地方ならではの「東京幻想」という問題があるというが、それをユニークな方法で解消しようとしている。それが、「クロスターンシップ」制度だ。

土屋有　つちや・ゆう
（株）アラタナ取締役。宮崎県出身。大学進学により上京、（株）アイレップや面白法人カヤックなどを経て2011年にアラタナ入社。サービス開発統括本部長を務める

FEATURE 2 : WEB CREATORS IN LOCAL LIFE

地方企業が始めた企業間留学

いくつになっても学ぶのは楽しい。特に未知の世界を学ぶのはワクワクする。しかし、社会人になったら学校に行く時間をとるのはなかなか難しい。下手をすると、同じ会社の中で一つの世界しか知らずに仕事に埋没されていくことになる。

このような問題を解決するために、企業間留学制度を設けた企業がある。ECサイトの制作、構築などを行う（株）アラタナだ。アラタナでは希望者を社内公募し、毎年1人ないしは2人程度を、「クロスターンシップ」制度に参加している企業に約1カ月の企業留学をさせている。（株）リブセンス、（株）ピクシブなどが参加しており、企業間で交換留学生を送りあうことになる。

「留学といっても、受け入れ企業がなにか用意するわけではありません。普通に仕事をしてもらう。他の企業の考え方、社内文化の違いを体験できることが大きな価値になります」（アラタナ執行役員、土屋有氏）

アラタナは、宮崎県宮崎市にある地元ベンチャー。宮崎だけでなく、九州中から優秀な人材が集まってきて、東京でなくてもベンチャーはやっていけるということを実証したことで注目されている企業だ。宮崎の海はサーフィンに適した波がでやすいことから、東京からわざわざ宮崎に移住をしてアラタナで仕事をする人も増え、今では移住組は4割近くにも達しているそうだ。

アラタナのクライアントは多くが東京、大阪だ。しかし営業拠点すらそこにはない。打ち合わせなどで不便は感じないのだろうか。

「まったく感じません。むしろ、対面する機会が少ない分、仕事の内容を文書化するようになるので、勘違いによるトラブルが起こりづらくなります」

また、クライアント企業の担当者の方が、積極的に宮崎に訪れてくることも多いという。アラタナは「宮崎でがんばっている地元ベンチャー」として有名になったので、打ち合わせを兼ねて、会社見学をしたがるクライアントも多いのだという。

土屋氏の基本的な考え方は、「デメリットを前向きに捉えればメリットになる」というもの。東京から遠い宮崎に会社があることは不利といえば不利。しかし、その不利をメリットに変える施策をどんどん実行している。そこにあるのは「優秀な人材育成」だ。質の高い制作をしていれば、クライアントは本社がどこだろうと発注するようになる。

そのため、東京、大阪、福岡などのセミナーや勉強会などにも社員を積極的に出席させる。その分、業務時間は削られることになるが、業務効率を徹底的にデータ化しているため、社員は長時間だらだら働くのではなく、短時間で集中して仕事をし、最大の成果をあげ、新しく生まれた時間を自分に投資するという姿勢が育ってきているという。

「東京幻想」に立ち向かう

ただし、今まで社員育成でどうしても乗り越えられないハードルがあった。それは「東京幻想」だ。

「弊社の社員はみな優秀なのに、それが自分ではわからず、東京の制作会社はレベルが高いのではないかと勝手に思いこんでしまうのです」

社員の大半は九州出身者で、東京や大阪で勤務した経験がない人も多い。つまり、知らないのに、あるいは知らないからこそ、勝手に東京はすごいと思いこんでしまうのだ。

「弊社以外の会社も経験してみたいと転職を考えられることは、会社としては損失になります。なにより、それで社員に悶々としていられたら業務効率は下がりますし、社員もハッピーになれない」

そこで生まれたのが、クロスターンシップという制度だ。一度、他の会社を知ることで、自分たちの能力や企業文化を再発見してもらうことが目的だ。

「海外に行くと、日本のよさがあらためてわかったりしますね。あれと同じ効果を狙っています」

しかし、この制度は劇薬にもなる。他企業に行ってみて、「やっぱりこっちのほうが面白い」と思い、転職されてしまうというリスクはある。

「それは仕方ないと思います。だけど、リスクを気にしていたらなにもできません。クロスターンシップで他企業の文化も知ったうえで、やはりアラタナで働きたいといってもらえるように、私たちはアラタナの文化を育てていかなければならない」

クロスターンシップの期間は、現在1カ月間。マンションなどはアラタナが負担し、もちろん給与も保証される。

「まだ始まったばかりなので、1カ月という期間が適切かどうかも見極めながら、この制度を充実させていきたいですね。とにかくやってみて、問題のある部分はどんどん直していけばいい。社内の制度もWeb開発と同じで、まず走らせてみて、どんどん修正をかけていくという『Web文脈』に沿ったやり方をしています」

東京のWeb制作業界では、転職を繰り返すのが当たり前になっている。すでに一定のスキルを持っている人は、どんどん転職をしていっても問題がないが、これからスキルを身につけなければならない若い世代はキャリアデザインを慎重に考えないと、結局なにも身につかないまま中堅になってしまうという危険性がないとはいえない。どの企業も優秀な社員を育てていく施策は打っているが、転職者が多く社員が流動する状態ではなかなか教育の効果があがらないという悩みがある。

アラタナのクロスターンシップ制度は社員の離職率を抑える効果があり、同時に社員に異なる世界を知ってもらえる制度だ。

「アラタナは宮崎の地元に密着したベンチャーであることもあって、離職率がとても低いんです。4割は女性社員で、夫婦でアラタナで働いている例もたくさんあります」

地元企業で仕事をし、留学制度を使って他の企業の文化や方法論を学ぶ。アラタナが始めたこの制度にたくさんの企業が参加するようなことになると、業界内でいい意味での人の流動性が高まり、新たな活力が湧いてくるかもしれない。

受け入れ側の現状とその対策

移住・定住に力を入れた地方を探すには

移住の場合、その受け入れ先となる地方自治体は地方創生の旗のもと、各地でいろいろな「歓迎のしかた」を考えている。そこで、地方移住の推進を図る一般社団法人　移住・交流推進機構（JOIN）に各自治体の施策の実際を聞いてみた。

後藤千夏子氏（左）JOIN（一般社団法人 移住・交流推進機構）統括参事
森山忍（右）JOIN参事
JOINのスタッフは民間企業や地方自治体・公共団体などからの出向者で構成され、後藤氏は富士通から、森山氏は公益財団法人ふるさと島根定住財団から派遣されている

1月18日、東京ビッグサイトでJOIN主催のイベント「移住・交流＆地域おこしフェア」が開催され、全国40の道府県から266団体が出展。地方自治体等が、地域情報の提供や田舎暮らし相談を行った。来場者は6,800名を超えるなど、田舎暮らしへの関心の高さを窺わせる
http://www.iju-join.jp/feature/file/014/

―移住に注目が集まっている背景には何があるのでしょうか？

後藤氏：自然豊かな環境で暮らしたい、子育てしたい」「働き方を変えたい」「広々とした家で暮らしたい」等々の理由で、田舎暮らしを希望する人が増えています。少し前まで、移住といえばシニア世代が中心でしたが、最近は若者や子育て世代からの興味・関心が高まっています。

その背景には、人口減少・超高齢化という地方の課題解決に政府一体となって取り組もうとする「地方創生」の動きや、都市圏から移住者を呼び込み、地域を活性化させようとする地方自治体の動きが活発化したことがあげられます。

一方、若者の価値観が多様化していて、「地方で自己実現したい」「家族の絆を大事にしたい」というように、田舎暮らしに魅力を感じる若い世代も増えています。

―JOINでは移住に関するどのような情報提供を発信していますか？

後藤氏：移住希望者向けの情報ポータルサイト「ニッポン移住・交流ナビ」を開設しています。地域ごとの仕事情報や空き家情報が検索できるほか、移住相談会やお試し暮らしなどの移住・交流関連のイベント情報がまとまっています。アクセス数も、月間平均60万PVを超えています。

―Webクリエイターが移住先を探す際にも使えますか？

森山氏：はい。「Webクリエイター」という職種での絞り込みはできないのですが、Webクリエイターの方は都市部の仕事をそのまま引き継いだり移住先で新しいことを始めることが多いと思うので、特集記事から施策別に探していただくのがよいと思います。例えば、起業支援、結婚・子育て、住まいといったカテゴリーから検索すると、全国から自分の目指すライフスタイルに合った施策が見つかるかもしれません。起業支援という観点からは都市部よりも有利な条件で助成してくれるところもありますが、これはWebクリエイター向けということも多いでしょうね。

―地方の情報は他にどう見つければいいでしょう？

森山氏：ネットでは調べきれない生の声を移住者から得られるイベントもいろいろあります。また、東京などの都市部では各自治体のアンテナショップがあるので、そこで情報を得ることもできます。特集記事にもしていますので参考にしてみてください。例えば私の地元である島根県はITの取り組みがとても盛んで、『にほんばし島根館』（東京・日本橋三越前）で相談できます。

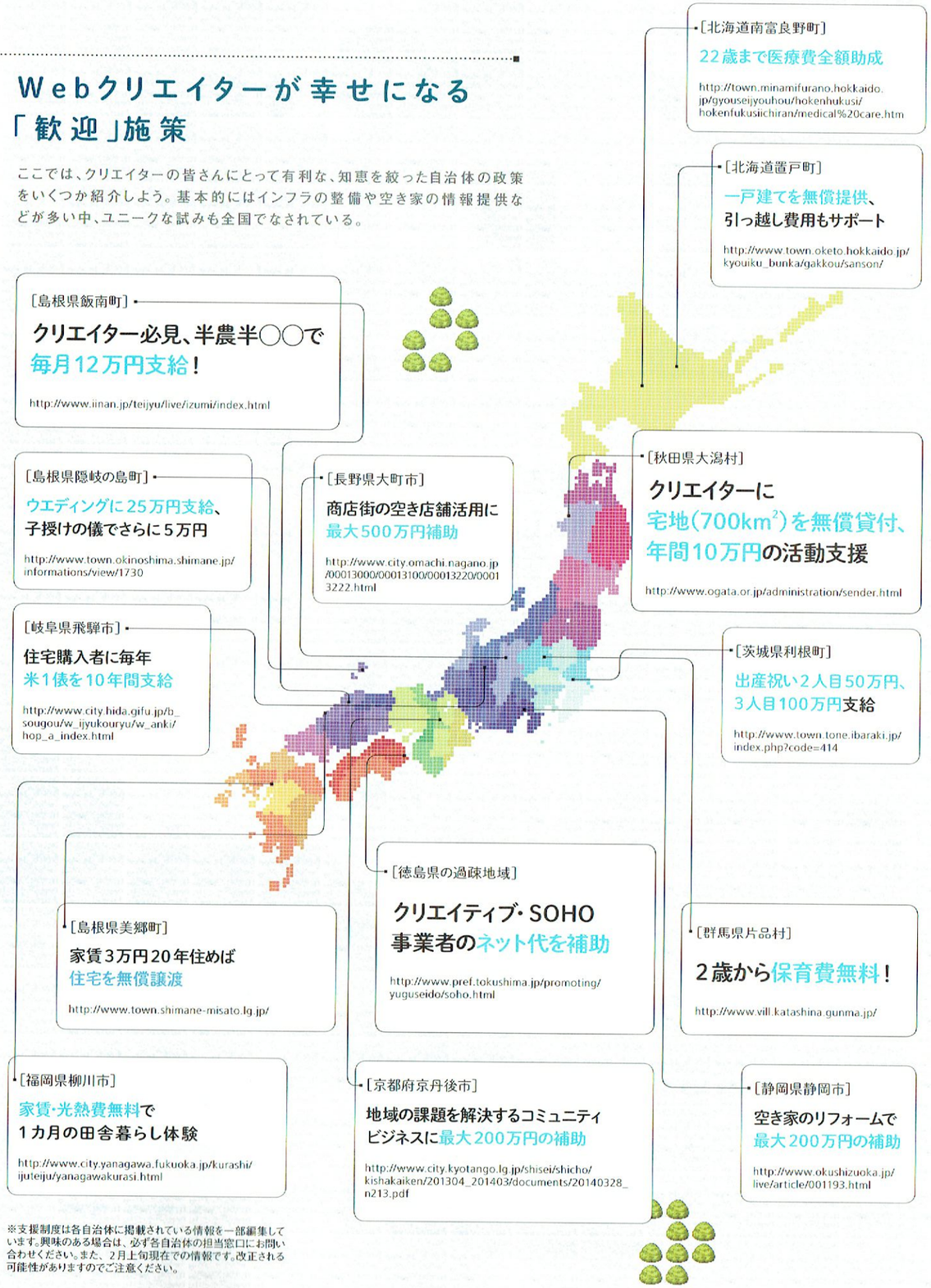
後藤氏：ほかにも銀座・有楽町近辺には、各県のアンテナショップが集結しており、長野県、高知県、群馬県は、ショップ内に移住相談窓口を設けています。また、自治体ごとに移住に関連する多種多様な支援制度を打ち出しているので、それもチェックしてみてください。移住希望者に、積極的なメッセージを発信する自治体が増えてきています。これらを見れば地域が、どのような人を呼び込みたいと考えているのか読み取れるはずです。

ニッポン移住・交流ナビ
http://www.iju-join.jp/
移住に興味が湧いたら、まずは情報収集。そんな時欠かせない情報源となるのが「ニッポン移住・交流ナビ」だ。全国各地の仕事情報や空き家情報が検索でき、条件を指定すれば候補地を絞り込むこともできる。移住相談会やお試しツアーなど各地のイベント情報が網羅されているので、移住を決める前に一定期間のお試しステイを体験してみたい方にもおすすめ

「ニッポン移住・交流ナビ」には、さまざまな切り口でまとめられた特集記事が掲載されている。なかでも人気なのが、「知らないと損する全国自治体支援制度2922」。起業支援はもちろん、定住促進奨励金やリフォーム支援、結婚・出産・就学時の祝い金など多種多様な支援制度がある

Webクリエイターが幸せになる「歓迎」施策

ここでは、クリエイターの皆さんにとって有利な、知恵を絞った自治体の政策をいくつか紹介しよう。基本的にはインフラの整備や空き家の情報提供などが多い中、ユニークな試みも全国でなされている。



［北海道南富良野町］
22歳まで医療費全額助成
http://town.minamifurano.hokkaido.jp/gyouseiyouhou/hokenhukusi/hokenfukusiichiran/medical%20care.htm

［北海道置戸町］
一戸建てを無償提供、引っ越し費用もサポート
http://www.town.oketo.hokkaido.jp/kyouiku_bunka/gakkou/sanson/

［島根県飯南町］
クリエイター必見、半農半○○で毎月12万円支給！
http://www.iinan.jp/teijyu/live/izumi/index.html

［島根県隠岐の島町］
ウエディングに25万円支給、子授けの儀でさらに5万円
http://www.town.okinoshima.shimane.jp/informations/view/1730

［長野県大町市］
商店街の空き店舗活用に最大500万円補助
http://www.city.omachi.nagano.jp/00013000/00013100/00013220/00013222.html

［秋田県大潟村］
クリエイターに宅地（700km²）を無償貸付、年間10万円の活動支援
http://www.ogata.or.jp/administration/sender.html

［岐阜県飛騨市］
住宅購入者に毎年米1俵を10年間支給
http://www.city.hida.gifu.jp/b_sougou/w_ijyukouryu/w_anki/hop_a_index.html

［茨城県利根町］
出産祝い2人目50万円、3人目100万円支給
http://www.town.tone.ibaraki.jp/index.php?code=414

［徳島県の過疎地域］
クリエイティブ・SOHO事業者のネット代を補助
http://www.pref.tokushima.jp/promoting/yuguseido/soho.html

［島根県美郷町］
家賃3万円20年住めば住宅を無償譲渡
http://www.town.shimane-misato.lg.jp/

［群馬県片品村］
2歳から保育費無料！
http://www.vill.katashina.gunma.jp/

［福岡県柳川市］
家賃・光熱費無料で1カ月の田舎暮らし体験
http://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/kurashi/ijuteiju/yanagawakurasi.html

［京都府京丹後市］
地域の課題を解決するコミュニティビジネスに最大200万円の補助
http://www.city.kyotango.lg.jp/shisei/shicho/kishakaiken/201304_201403/documents/20140328_n213.pdf

［静岡県静岡市］
空き家のリフォームで最大200万円の補助
http://www.okushizuoka.jp/live/article/001193.html

※支援制度は各自治体に掲載されている情報を一部編集しています。興味のある場合は、必ず各自治体の担当窓口にお問い合わせください。また、2月上旬現在での情報です。改正される可能性がありますのでご注意ください。

兵庫県

Special Thanks!

イベント　5/2～3［開催］兵庫

丹波キワモノ会議

hotrocke10@gmail.com（問い合わせ先）

特集制作にご協力いただいた、横田親さんが企画するオススメのイベントは、「丹波キワモノ会議」。全国でひっそり生きてきた、人には言えない趣味やわかってもらえない性格の人を丹波に一堂に集め、隠れた個性を見つけるというイベント。

横田親さん
兵庫県丹波市在住。4年半前に（株）リクルートキャリアを経て、現在丹波市議会議員として活躍中

転職アドバイザーの経験がある横田さんは、生き方に迷う人の相談に乗るうちに、移住がベストの選択と思える人には移住を勧め、仕事と家も一緒に探すとのこと。「お金を稼ぐ以外の時間に、自分が気持ちよく生きていくためのヒントが隠れてます。それを一緒に探したいです。先に住んでる僕らが居るわけですから」

全国各地のイベント、ツアー、セミナーは目白押し

イベントで地方暮らしを感じる。

地方自治体の制度などのほかにも、各地の魅力や相談にのるためのイベント、セミナー、体験ツアーなどが目白押しだ。ここでは主に2～3月に開催予定のごく一部を紹介しよう。地方の暮らしがどんなものか、気になった方は、気軽に立ち寄ってみてはいかがだろう。

イベント　3/1　［開催］東京

地方移住クリエイターサミット 2015 in TOKYO

http://fcc.city.fukuoka.lg.jp/event/fukuoka0301/

福岡市は、全国各地で活躍するクリエイターを迎え、クリエイターの地方移住を考えるイベント「地方移住クリエイターサミット2015 in TOKYO」を、2015年3月1日に東京・竹橋のマイナビ本社にて開催。このイベントは、昨年9月から福岡市が実施している、福岡移住を考えるクリエイター・エンジニアの支援プロジェクト「ぼくらの福岡クリエイティブキャンプ」の一環として開催されるもの。福岡にとどまらず、北は北海道から南は沖縄まで、各地域で活躍するクリエイターを迎え、それぞれの地方で暮らすこと・働くことのメリット・デメリットなどを紹介する。詳しくは本誌014ページへ。

兵庫県　セミナー　3/14　［開催］神戸
東備西播定住自立圏形成推進協議会合同定住相談会
http://www.city.ako.lg.jp/koushitsu/kikaku/teijyu/teijyu-soudankai.html

滋賀県　ツアー　3/1　［開催］滋賀
三方よし!近江日野"田舎体験"空き家見学ツアー

奈良県　ツアー　2/21～22　［開催］奈良
川上ingツアー
～川上村の「職と住」をご紹介～
http://kawakaming.com

三重県　イベント　3/1　［開催］三重
ええとこやんんか三重移住者交流会
http://www.ijyu.pref.mie.lg.jp/contents/mie_news_detail.php?no=120

和歌山県　セミナー　2/21　［開催］東京
三重・奈良・和歌山3県合同ライフスタイルセミナー
http://www.wakayama-inakagurashi.jp/system/?d=user&a=news.news_view&news_id=294

岡山県　ツアー　3/7　［開催］岡山
おっへえそう!おかやま吉備中央町地域とつながる田舎暮らし体験ツアー
http://www.town.kibichuo.lg.jp/

島根県　ツアー　3/20～22　［開催］島根
有機の里de子育て体験
http://blog.livedoor.jp/yoshikadekurasu/archives/8680102.html

富山県　セミナー　2/21［開催］大阪／2/22［開催］名古屋
元気とやま!就職セミナー【学生等向け】
https://www3.ibac.co.jp/2016/gtym/login.jsp

福島県　セミナー　3/7～8　［開催］福島
お得な福島県奥会津で田舎暮らしを考えるバスツアー
http://www.iju-join.jp/upimg/kiji/c06031de83342b6ce6bcb61d124ee896.pdf

岐阜県　ツアー　2/21～22　［開催］岐阜
郡上暮らし拝見ツアー「おしごと編」
http://www.furusato-gujo.jp/taiken/taiken/haiken-h25.html

岐阜県　セミナー　3/7　［開催］東京
清流の国ぎふ暮らしセミナー
http://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/chiiki-shinko/iju-teiju/soudankai/

新潟県　セミナー　2/21　［開催］東京
にいがた暮らしセミナー
～にいがた暮らしらイフプランセミナー～
http://www.furusato-niigata.com

山梨県　セミナー　3/8　［開催］東京
第11回やまなし暮らしセミナー（韮崎市）
http://www.city.nirasaki.lg.jp/docs/2015011600017/

長野県　ツアー　3/14～15　［開催］長野
羊の里で田舎暮らし体験
長野市信州新町　一泊二日の旅
http://www.city.nagano.nagano.jp/soshiki/shiminkatudo/102980.html

石川県　セミナー　3/7毎月第1土曜　［開催］大阪
いしかわ暮らし就職・移住相談会
http://iju.ishikawa.jp/news/20141114-2.html

島根県　ツアー　3/7～9　［開催］奥出雲町
「生きる力」を育むまち　奥出雲のひみつ
http://www.iju-join.jp/upimg/kiji/481eb2b2ec2ec42f0b026290f737c903.pdf

愛媛県　ツアー　3/7　［開催］伊予市
群中まち暮らし体験ツアー
http://www.machidukuri-gunchu.jp/images/ijyuu-tuer2.pdf

香川県　ツアー　3/14～15　［開催］さぬき市
第2回さぬき暮らし体験ツアー
http://www.city.sanuki.kagawa.jp/eetoko/news/1616/

大分県　セミナー　2/21　［開催］東京
おおいた暮らし塾
http://www.iju-oita.jp/uploads/photos/2788.pdf

長野県

Special Thanks!

大徳孝幸さん
長野県小布施町在住。2013年4月より、国内旅行の民間企業から小布施町役場に出向。小布施町での活動を通して、若者と「暮らし」や「移住」に関して意見交換を行っている

イベント　2/21　［開催］長野

小布施町第二町民ツアー

http://obuse-conference.jp/

今回の特集にご協力いただいた大徳孝幸さんのおすすめイベントは、「第二町民ツアー」。面白い生き方、暮らし方、働き方をしている小布施人にフォーカスし、観光ではわからない魅力まで紹介。ツアー参加者は「第二町民」に認定され、町民が参加する年間行事などに特別招待される。

大徳さんは全国から100人の若者を集めて3日間に渡って地方の未来を議論する「小布施若者会議（http://www.obuse-conference.jp/2013/）」の企画・運営、官民との移住セミナーの実施。小布施町のまちづくりの歴史について、大学や自治体に向け講演等でも精力的に活動している。

移住フェス

https://www.facebook.com/events/280866182121234/

2月7日、東京でエリアルとベストチーム・オブ・ザ・イヤー実行委員会の主催によるイベント「移住フェス」が開催された。京都移住計画や福岡移住計画、ココロココ、東北開墾、アズキノイス（小豆島）といった日本各地で活動を行う15のNPO、法人、地域団体が協力し、約100名の参加者が集った。
各団体は会場内の各エリアに分かれ、参加者は気になる地域の話を聞きに行く。対面はもちろん、現地にいる移住者とオンラインで会話もできた。Uターン者やIターン者などからそれぞれの経験を通し、各地方での暮らしについて生の声を聞ける貴重な機会になった。観光と定住の間にあるもの、それは地元の人との「交流」。その交流の機会をさらに増やすべく、同イベントは今後も開催される。参加者は「地方ってどんなとこ？」程度の気持ちで来場する人も多いので、興味本位で参加するのもいいだろう。